

山形昭の体育科（第6学年）研究計画

1 本研究で目指す子ども

体育科の目標は、「生涯にわたって運動に親しむ資質や能力の基礎を育てる」ことである。運動に親しむ資質や能力とは、自らの力で運動課題を見付け、運動課題を解決するための体の動かし方（運動のこつ）を見いだしていく力であると考え。なぜなら、その力を備えた子どもは、様々な運動領域でその力を発揮し、新たな運動課題を解決して技能を上達させることができるからである。

これまでの指導でも、自らの力で「運動のこつ」を見いださせるために、手本を提示したり自分の体の動かし方を映像で観察させたりしてきた。しかし、これらだけでは、子どもは「運動のこつ」を見だし、運動課題を解決することはできなかった。それは、「運動のこつ」を部位に焦点化できなかったからである。

その問題を解決しようと考え、昨年度は中学年の体づくり運動「多様な動きをつくる運動」の領域において、部位に焦点化させて「運動のこつ」を見いださせるように指導を工夫してきた。何人かの子どもは、部位に焦点化して体の動かし方を考えたり工夫したりして「運動のこつ」を見だし、技能を上達させることができた。しかし、中には上達できなかった子どももいた。

その原因は、2点考えられる。

1点目は、技能を上達させるにはどうすればよいかという問いをもった子どもに、部位に焦点化させる学習カードを提示し、自分の体の動かし方を観察させて、その後手本の映像を見せて体の動かし方を修正させてきたことにある。簡単に言うと「問い→部位に着目→自分の映像→手本の映像」の順番である。しかし、この流れでは、子どもは自分の目指すゴールイメージをもたないまま、部位という視点を与えられるため、自分の体の動かし方を観察しても、部位に焦点化した「運動のこつ」を見いだせなかったのである。

2点目は、自分の運動課題を見付け、「運動のこつ」を見いださせるために、自分の映像と手本の映像とを比較させようとタブレット端末を使わせた際、タブレット端末を1台だけ与えたために、自分の映像と手本の映像を順番に見るしかなかったことにある。そのため、比較が難しかったのである。

そこで、今年度は、問いをもった子どもに手本の映像を提示し、ゴールイメージをもたせた後に部位に着目させて自分の体の動かし方を観察させる。こうすることで、部位に着目した修正点を見だしやすくする。さらに、手本の映像と自分の映像を同時に見るようにして、比較しやすくさせる。こうして、高学年の器械運動において、「**運動のこつ**」と**そのこつの見だし方が分かり、技能を上達させる子ども**を目指す。

(1) 「中核的な知識や技能」

運動課題を解決するための体の動かし方（運動のこつ）が分かり、技能を上達させること

(2) 「学びをつなぐ力」

- ① 比較するすべを用いて、自分と手本の体の動かし方の相違点から、できない技ができるようになるための体の動かし方を収集する力
- ② 関係付けるすべを用いて、収集した体の動かし方を実際に試してみることで、技を身に付けるための「運動のこつ」を見いだす力

2 主張する働き掛け

まずは、基礎となる運動感覚を養うために、学習カードを配付し、易しい運動に取り組ませる。子どもは、学習カードにかかれた技を、自分ができそうな技から取り組む。ここでの子どもは、部位に着目して「運動のこつ」を見いだして練習すればできるようになるとは考えず、「勢いを付ければできる」などと考えている（C0）。

働き掛け1

「**手本の映像**」を提示し、**できない原因を問う**。

問いをもたせるための働き掛けである。技の運動局面ごとの絵を提示し、様々な技の中から自己の能力に適した技の一つを選択させる。選択した技を実際に試させ、できるようになった場合は新たな技を再度選択させる。難易度を高めて新たな技を設定させるために、やがてできない技に出会う。このような子どもにめあてを問う。子どもは、できない技ができるようになりたいというめあてを立てる。

めあてを立てた子どもには**手本の映像（「対象」①）**を提示し、「どうしてその技ができないのか。その技ができない原因は何か」を問う。自分の体の動かし方を意識している子どもは、「ここがよくないのかな」と予想したり、意識していない子どもは「自分とどこが違うのか、よく分からない」と考えたりする。できない技ができるようになりたいというめあてをもちながらも、できるようになるための明確な見通しをもてていない姿を問いをもった姿とする。

この時点で技ができた子どもに、「なぜ、その技ができるのか。気を付けていることはあるか」を問い、技ができるようになるための「運動のこつ」を付箋に記入させておく（達成の秘伝書）。さらに、同じめあてをもった子ども同士でペアやグループを組んでおく。

働き掛け2

できない技ができるようになりそうな体の動かし方を問い、できない自分の運動の様子を動画撮影させる。

自分の体の動かし方と手本の体の動かし方との比較により、課題解決に必要な体の動かし方を収集させ、できるようになるための見直しをもたせる働き掛けである。問いをもった子どもに、「できない技ができるようになるには、体のどこをどう動かしたらよいか」を問い、学習課題を提示する。その後、再度**手本の映像（「対象」①）**を提示したり、できない自分の運動の様子を動画撮影させたりする。撮影後、手本や自分の体の動かし方をワークシートに記述させる。子どもは、比較するすべを用いて、自分の映像と手本の映像とを比べる。このとき、自分の映像と手本の映像とを比較しやすくするために、2台のタブレット端末や拡大モニターを使わせたり、映像を重ねて提示できるアプリを使わせたりする。

ここで、部位に着目して違いに気付いた子どもの考えを発表させて、部位に着目するという視点を共有させる。子どもは、その視点を基にして、自分と手本の体の動かし方の共通点や相違点を考える。そして、できない原因に気づき、手本の体の動かし方を真似してみるとできるようになるのではないかと見直しをもつ。

働き掛け3

個々の能力に適した練習の場を設定し、試した「運動のこつ」を評価させる。

「運動のこつ」を見いだし、できない技をできるようにさせるための働き掛けである。「手本の体の動かし方を真似してみよう」と考えた子どもに、様々な練習の場を提示し、自分に合った練習の場を選択させ、試しの運動を行わせる。試しながら、自分が選んだ体の動かし方が自分の課題を解決するのに適しているかどうかを◎○×の3段階で評価させる。その際、自分の運動の様子を動画撮影させる。このときの子どもは、できない原因と手本の体の動かし方を試した結果とを関係付けるすべを用いて判断する。

働き掛け4

「達成の秘伝書」を提示し、新たな「運動のこつ」を試させる。

試した体の動かし方で、自分の課題を解決する子どももいれば、そうでない子どももいる。解決できない子どもがいた場合には、できた友達の「運動のこつ」が書かれた**達成の秘伝書（「対象」②）**を提示する。できない子どもは、「対象」①や「対象」②を見たり、練習の場を変えたりする。子どもは、【「対象」から新たな情報を得る→練習の場を選択する→試す】という一連の流れを繰り返す。そして、「運動のこつ」を見いだし、できなかった技ができるようになったり上達したりする。

「学びをつなぐ力」の有用性の自覚を促す働き掛け

「見付けたこつ」と「こつの見付け方」を問い、「上達への道」を振り返らせる。

学びをつなぐ力の有用性を自覚させるための働き掛けである。できなかった技ができるようになった、もしくは、上達した子どもに、「見付けたこつ」と「こつの見付け方」を問い、「上達への道」を振り返らせる。そして、「運動のこつ」とそのこつの見いだし方が分かり、技能を上達させる（Cn）。

3 検証

(1) 検証すること

- ① 構想した働き掛けにより、「中核的な知識や技能」を獲得することができたか。
- ② 構想した働き掛けにより、「学びをつなぐ力」を発揮することができたか。
- ③ 構想した働き掛けにより、「学びをつなぐ力」の有用性を自覚することができたか。

(2) 検証の方法

- ① 働き掛け3、4を受けて、運動課題を解決するための体の動かし方が分かり、技能を上達させることができたかどうかを、ワークシートの記述や実際の様子から検証する。
- ② 働き掛け2、3、4を受けて、比較するすべや関係付けるすべを用いて、自分の挑戦する技ができるようになるための「運動のこつ」を収集・判断することができたかを、ワークシートおよび実際の様子から検証する。
- ③ 「学びをつなぐ力」の有用性の自覚を促す働き掛けを受けて、想定した「学びをつなぐ力」①もしくは②の有用性を自覚しているかどうかを、体育ノートの記述から検証する。

4 年間の授業計画

- (1) 指定研究授業（6月） 「夏季フズリンピック～鉄棒運動～」（6時間）
- (2) 中間検討会（9月） 「秋季フズリンピック～マット運動～」（6時間）
- (3) 初等教育研究会（2月） 「冬季フズリンピック～跳び箱運動～」（6時間）